

令和8年3月26日

令和7年度日本芸術院賞授賞者の決定について

(日本芸術院賞11組、重ねて恩賜賞3組)

日本芸術院(院長 野村萬)は、日本芸術院賞授賞者11組(うち、3組に対し重ねて恩賜賞授賞)を決定しましたので、お知らせします。

1. 日本芸術院賞の授賞について

日本芸術院は、毎年、卓越した芸術作品又は芸術の進歩に貢献する顕著な業績があると認められる者に対して恩賜賞・日本芸術院賞の授賞を行っています。

日本芸術院の授賞制度は、昭和16年度に日本芸術院賞、昭和24年度に恩賜賞が創設され、令和7年度で82回目の授賞となります。

2. 授賞者について

(授賞者の授賞理由及び略歴(本人確認済)等は別添資料を御覧ください。)

【第一部(美術)】

恩賜賞・日本芸術院賞

せじま かずよ
 妹島 和世
 にしざわ りゅうえ
 西沢 立衛 (本名: 西澤 立衛)

日本芸術院賞

たまがわ しんいち
 玉川 信一

日本芸術院賞

まつむら こうじ
 松村 公嗣

日本芸術院賞

なかむら のぶお
 中村 伸夫

日本芸術院賞

ふじわら しんや
 藤原 新也

【第二部(文芸)】

恩賜賞・日本芸術院賞

ぬまの みつよし
 沼野 充義

【第三部(音楽・演劇・舞踊)】

恩賜賞・日本芸術院賞

くりやま たみや
 栗山 民也

日本芸術院賞

たけもと ちとせだゆう (本名: しみず けんじ)
 竹本 千歳太夫 (本名: 清水 賢治)

日本芸術院賞

きよもと よしじゅだゆう (本名: こやなぎ よしひろ)
 清元 美寿太夫 (本名: 小柳 吉弘)

日本芸術院賞

いけべ しんいちろう (本名: いけべ しんいちろう)
 池辺 晋一郎 (本名: 池邊 晋一郎)

日本芸術院賞

り きんい
 李 相日

3. 授賞式について

令和8年7月に日本芸術院会館(東京都台東区)において行う予定です。

※今後の調整により変更となる可能性もあります。

<担当>

日本芸術院

事務長 植垣 健一

庶務係長 鈴木 啓太

主任 白井 友美

電話 03-3821-7191

建築・デザイン分科

せ じま かず よ
妹 島 和 世

職名（肩書き） 建築家

昭和31年10月29日 茨城県生まれ 69歳



授賞対象

「あなぶきアリーナ香川（香川県立アリーナ）」に対し

授賞理由

令和6年、香川県高松市に完成した「あなぶきアリーナ香川（香川県立アリーナ）」は美しい形態を備えた秀作である。1万人を収容するメインアリーナとサブアリーナを2つの白いドーム状の屋根が連結し、さらに武道施設も併設されている。その外観は瀬戸内海に浮かぶ小島のように景観に溶け込み、環境に調和している。またイベントの行われなくても公園のように市民の憩いの場として日常的な賑わいを生み出しており、地方都市の公共施設として市民に親しまれている。

【略歴】

昭和56年 日本女子大学大学院修了

平成22年 ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展総合キュレーター

令和4年 東京都庭園美術館長（現在まで）

【賞歴】

平成10年 日本建築学会賞（後1回）

平成16年 ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展金獅子賞

平成17年 ロルフ・ショック賞

平成22年 フランス芸術文化勲章オフィシエ

平成22年 プリツカー建築賞

平成28年 紫綬褒章

令和4年 高松宮殿下記念世界文化賞

令和6年 文化功労者

令和7年 王立英国建築家協会ロイヤル・ゴールド・メダル

建築・デザイン分科

にし ざわ りゅう え
西 沢 立 衛

(本名 にしざわ りゅう え
西澤 立衛)



© Office of Ryue Nishizawa

職名（肩書き） 建築家

昭和41年2月7日 東京都生まれ 60歳

授賞対象

「あなぶきアリーナ香川（香川県立アリーナ）」に対し

授賞理由

令和6年、香川県高松市に完成した「あなぶきアリーナ香川（香川県立アリーナ）」は美しい形態を備えた秀作である。1万人を収容するメインアリーナとサブアリーナを2つの白いドーム状の屋根が連結し、さらに武道施設も併設されている。その外観は瀬戸内海に浮かぶ小島のように景観に溶け込み、環境に調和している。またイベントの行われなくても公園のように市民の憩いの場として日常的な賑わいを生み出しており、地方都市の公共施設として市民に親しまれている。

【略歴】

- 昭和63年 横浜国立大学工学部建築学科卒業（平成2年同大学院工学研究科計画建設学専攻修士課程修了）
平成13年 横浜国立大学大学院助教授（同19年准教授、同22年教授、同29年都市科学部教授併任、現在まで）

【賞歴】

- 平成10年 日本建築学会賞（後2回）
平成16年 ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展金獅子賞
平成17年 ロルフ・ショック賞
平成22年 プリツカー建築賞
平成23年 フランス芸術文化勲章オフィシエ
平成24年 村野藤吾賞
平成30年 毎日デザイン賞
令和元年 吉阪隆正賞
令和4年 高松宮殿下記念世界文化賞
令和7年 王立英国建築家協会ロイヤル・ゴールド・メダル

絵画分科

たま がわ しん いち
玉 川 信 一



職名（肩書き） 洋画家

昭和29年1月8日 福島県生まれ 72歳

授賞対象

「墮ちる夜」（令和6年第77回二紀展巡回展）に対し

授賞理由

この作品は油彩画の基本を踏まえて、入念に制作されたものである。ここには作家の「いま」が明確に反映されている。絵の背景は無機質で記号を付けた倉庫のような建物が並んでいる。その前に立つ男は、あたかも仮面劇に登場する人物であるかのように表情はない。玉川信一氏はこの一連の作品で心象的な絵画のリアリティとは何かと、さらに思考をつづけて制作したいと、意気盛んである。

【略歴】

- 昭和53年 東京教育大学大学院修士課程教育学研究科美術学専攻修了
- 平成4年 文化庁在外研修員特別派遣渡仏
- 平成6年 筑波大学芸術学系助教授（同15年教授、同24年執行役員・芸術系長、同27年副学長、同31年名誉教授、現在まで）
- 平成9年 二紀会委員（同21年理事、令和5年常務理事、現在まで）
- 令和2年 教育美術振興会理事（現在まで）

【賞歴】

- 昭和52年 二紀展二紀賞
- 昭和60年 昭和会展昭和会賞
- 昭和60年 安井賞展佳作賞
- 平成6年 文化庁作品買上げ
- 平成16年 紺綬褒章（後1回）
- 平成20年 二紀展文部科学大臣賞
- 令和4年 二紀展内閣総理大臣賞

絵画分科

まつ むら こう じ
松 村 公 嗣



職名（肩書き） 日本画家

昭和23年1月26日 奈良県生まれ 78歳

授賞対象

「雪月花」（令和3年再興第106回院展）に対し

授賞理由

松村公嗣氏は奈良県桜井市に生まれ、愛知県立芸術大学に於いて日本画を学び、片岡球子氏に師事した。日本美術院の春の院展、院展、グループ展、山種美術館賞展、個展等に数多くの独自の作品を次々と出品し、発表してきた。そのデッサンと線描と画面構成の日本画作品は多くの鑑賞者を魅了している。愛知県立芸術大学の教授として、学長として、そして日本美術院同人として、多くの後進の日本画家を指導し、多くの信頼と尊敬を集めている。日本芸術院賞授賞作品の「雪月花」は独自の個性と、優美な気品と、伝統的な日本の美意識を顕著に示している。

【略歴】

昭和47年 愛知県立芸術大学卒業（同49年同大学院修了）

昭和47年 院展初入選

平成6年 愛知県立芸術大学日本画専攻助教授（同12年教授、同25年学長、同30年名誉教授、現在まで）

平成10年 日本美術院同人推挙（同23年理事、現在まで）

【賞歴】

平成7年 日本美術院奨学金（前田青頓賞）

平成9年 春の院展外務大臣賞

平成10年 院展日本美術院賞（大観賞）

平成16年 院展文部科学大臣賞

平成19年 院展内閣総理大臣賞

平成22年 産経児童出版文化賞美術賞

令和3年 愛知県芸術文化選奨文化賞

令和5年 瑞宝中綬章

書分科

なか むら のぶ お
中 村 伸 夫



職名（肩書き） 書家

昭和30年1月27日 福井県生まれ 71歳

授賞対象

「劉廷芝詩句」（令和6年第11回日展）に対し

授賞理由

中村伸夫氏は長年にわたり篆書(金文)作品の研究に心血を注ぎ、伝統書法の深淵を探求しつつ、現代性を加味した表現を追求し続けた。授賞対象作「劉廷芝詩句」は、象形性を有し生命力に横溢した金文を素材としながらも、一点一画、奇を衒うことのない沈着な線條で書かれる。動と静を紙面の中で見事に融合させ、現代的感性と理知性を包含した優れた作である。また中村氏は長年、大学で教鞭を執りながら書の学術的研究にも努めてきた。後進の育成に尽力してきたことも評価される。書作と書学、教育におけるこれまでの貢献は顕著で、今後、益々の活躍が期待される。

【略歴】

- 昭和49年 今井凌雪に師事
- 昭和57年 筑波大学大学院修士課程芸術研究科修了
- 昭和57年 日展初入選
- 平成12年 読売書法会常任理事（現在まで）
- 平成16年 日本書芸院常務理事（令和4年副理事長、現在まで）
- 平成18年 筑波大学大学院人間総合科学研究科教授（令和2年名誉教授、現在まで）
- 平成18年 日展審査員（後4回）
- 平成19年 全国書美術振興会評議員（同28年理事、令和6年常務理事、現在まで）
- 令和7年 全日本書道連盟理事長（現在まで）

【賞歴】

- 平成24年 日展会員賞
- 平成30年 日展東京都知事賞
- 令和4年 日展内閣総理大臣賞

写真・映像分科

ふじ わら しん や
藤 原 新 也

職名（肩書き） 写真家

昭和19年3月4日 福岡県生まれ 82歳

授賞対象

写真集「祈り」（令和4年7月発表）に対し



撮影 石井 朋彦

授賞理由

藤原新也氏は、日本の写真界を牽引してきた第一人者である。その作品はこの世とあの世を現実世界で交差させ、足元の表裏に彼岸はがあると看破する。その語り口は熱量をたたえ、印画紙は真実と虚構の生々しい合わせ鏡と化す。藤原氏は時代を作り、時代を映し撮った。そして時代を牽引し、若者たちの代弁者であった。卑近な光景を通し、人々の人生を誠実に同じ目線で目撃し、その旅路を自分のこととして体験化し、胸の中の記憶の最深部を暴き出した。この人間存在のリアルを人間的洞察を交え作品化した藤原氏の業績には比類なきものがある。

【略歴】

昭和44年 東京藝術大学美術学部絵画科油絵専攻中退
平成6年 蓮如賞選考委員（同13年まで）
平成6年 木村伊兵衛写真賞選考委員（同21年まで）
平成14年 新潮ドキュメント賞選考委員（同21年まで）
平成27年 Bunkamura ドウマゴ文学賞選考委員

【賞歴】

昭和53年 木村伊兵衛写真賞
昭和56年 毎日芸術賞
昭和59年 日本文化デザイン賞
平成11年 北九州市民文化賞
平成16年 福岡県文化賞

ぬま の みつ よし
沼 野 充 義



職名（肩書き） ロシア東欧文学研究・翻訳家、文芸評論家

昭和29年6月8日 東京都生まれ 71歳

授賞対象

「世界文学論」を中心とする現代文芸評論の傑出した業績に対し

授賞理由

沼野充義氏は、ナボコフ、レム、チェーホフなどロシア・ポーランド文学を翻訳・紹介し、日本と世界の現代文学を幅広く論じてきた文芸評論家である。主著「徹夜の塊」三部作の第三部となる「世界文学論」は、ロシア・東欧を中心とする各国文学を読み抜き、作家や詩人との交流を通して世界文学のあり方を考察した壮大な成果報告である。「亡命文学論」、「ユートピア文学論」とともに、全体として現代日本の文芸評論の到達点となっている。沼野氏は日本ロシア文学学会会長、日本ペンクラブ副会長などを歴任し、学界と評論界の双方で大きく貢献している。

【略歴】

- 昭和52年 東京大学教養学部教養学科卒業（同54年同大学院人文科学研究科露語露文学専攻修士課程修了、同60年同大学院人文科学研究科露語露文学専攻博士課程単位取得満期退学）
- 昭和56年 ハーバード大学留学（フルブライト全額給費奨学生）スラヴ語スラヴ文学専攻博士課程（同60年まで）
- 昭和60年 東京大学教養学部専任講師（平成元年助教授、同6年文学部助教授、同7年人文社会系研究科助教授、同16年同大学院人文社会系研究科・文学部教授、令和2年まで）
- 昭和62年 ワルシャワ大学東洋学研究所日本語日本文学客員講師（同63年まで）
- 平成21年 日本ロシア文学学会会長（同25年まで、同27年ロシア文学学会大賞選考委員長、同29年まで）
- 平成27年 日本ペンクラブ国際委員会委員長（同29年理事・国際委員会委員長、令和元年常務理事、同3年副会長、同5年常務理事、現在まで）
- 令和2年 名古屋外国語大学副学長（同4年まで）、世界教養学部教授（同7年まで）

【賞歴】

- 平成14年 サントリー学芸賞
- 平成16年 読売文学賞
- 令和3年 ポーランド共和国文化功労勲章
- 令和7年 ICCEES（国際中欧・東欧研究協議会）賞
- 令和7年 坪内逍遙大賞

演劇分科

くり やま たみ や
栗 山 民 也



職名（肩書き） 演出家

昭和28年1月15日 東京都生まれ 73歳

授賞対象

現代演劇を中心とした幅広い活躍に対し

授賞理由

栗山民也氏は現代演劇界をリードする演出家である。作品を深く読み込み立体化させる卓越した手腕により、「闇に咲く花」「太鼓たたいて笛ふいて」「きらめく星座」などの井上ひさし作品に代表される現代の劇作家から、「GHETTO/ゲットー」「海をゆく者」「星の降る時」「夜への長い旅路」などの翻訳劇、さらにはミュージカルの「スリル・ミー」「デスノート THE MUSICAL」、オペラの「蝶々夫人」まで幅広く手掛けて成果を上げている。また新国立劇場演劇芸術監督、同劇場演劇研修所初代所長を務めるなど演劇振興や後進の育成にも尽力している。

【略歴】

昭和50年 早稲田大学文学部演劇科卒業

平成12年 新国立劇場演劇芸術監督（同19年まで）

平成17年 新国立劇場演劇研修所長（同28年まで）

【賞歴】

平成8年 紀伊國屋演劇賞個人賞

平成8年 読売演劇大賞最優秀演出家賞（後1回）

平成11年 毎日芸術賞千田是也賞

平成14年 朝日舞台芸術賞

平成24年 芸術選奨文部科学大臣賞

平成25年 紫綬褒章

平成31年 読売演劇大賞大賞、最優秀演出家賞

令和5年 旭日小綬章

令和7年 菊田一夫演劇賞演劇大賞

文楽分科

たけもと ちとせだゆう
竹本 千歳 太夫

(本名 しみず けんじ
清水 賢治)



画像提供 文楽協会

職名（肩書き） 文楽太夫

昭和34年5月13日 東京都生まれ 66歳

授賞対象

義太夫節の語りを高度な水準で勤め、文楽の発展に寄与した業績に対し

授賞理由

竹本千歳太夫氏は、時代物の大曲「一谷嫩軍記・熊谷陣屋の段」では、忠義のため、わが子を身替りに討たねばならなかった武将の苦衷と無常観を迫力ある語りで描出、世話物の代表作「心中天網島・北新地河庄の段」では、登場人物の心情と当時の大坂の色町の風情をきめ細やかな語りで活写した。時代物、世話物を問わず、つねに全身全霊の語りで人間の情愛や苦悩に迫り、義太夫節の深淵な魅力を伝えている。古典はもとより、復曲にも意欲的に取り組み、文楽のレパートリーを広げる努力を続けるなど、「切語り」の重責を立派に果たしている。

【略歴】

- 昭和53年 四代目竹本越路太夫に師事
- 昭和54年 竹本千歳太夫と名乗る
- 昭和54年 朝日座で初舞台
- 平成11年 重要無形文化財「人形浄瑠璃文楽」（総合認定）保持者

【賞歴】

- 昭和60年 国立劇場文楽賞文楽奨励賞（後2回）
- 平成12年 芸術選奨文部大臣新人賞
- 平成17年 京都府文化賞奨励賞
- 平成21年 松尾芸能賞優秀賞
- 平成29年 国立劇場文楽賞文楽大賞（後1回）
- 令和4年 芸術選奨文部科学大臣賞
- 令和6年 紫綬褒章

邦楽分科

きよもと よしじゅだゆう
清元 美寿太夫

(本名 こやなぎ よしひろ
小柳 吉弘)

職名 (肩書き) 清元節太夫

昭和18年1月29日 東京都生まれ 83歳



授賞対象

長年にわたる「清元節」の継承・発展に寄与した業績に対し

授賞理由

清元節は高音を多用し、軽妙且つ艶のある語りで、役の心情を余すところなく表現するといわれるが、清元美寿太夫氏の語り（浄瑠璃）は、江戸の世界観を自然な形で、且つ品格をもって醸し出す。清元氏は芸の根幹に祝儀物である「北州」^{ほくしゅう}を置くと語りしており、皮膚感覚に訴える情緒より、深く透明感ある、心の琴線に触れる浄瑠璃である。後進の指標となる斯界の宝であり、歌舞伎、日本舞踊にとっても、欠くべからざる存在である。

【略歴】

- 昭和31年 六代清元延寿太夫、三代清元栄次郎（後の初代清元栄寿郎）に師事
- 昭和34年 清元美寿太夫の名を許される
- 昭和34年 新橋演舞場「西川流鯉風会」梅川で初舞台
- 昭和34年 歌舞伎座「昔噺桃太郎」^{むかしばなしももたろう}で初舞台
- 昭和52年 京都南座「夕顔棚」^{ゆうがおだな}で初めて歌舞伎の立語りを勤める
- 平成26年 重要無形文化財「清元節」（総合認定）保持者
- 令和5年 重要無形文化財「日本舞踊」（総合認定）保持者

【賞歴】

- 昭和63年 清栄会奨励賞
- 平成27年 文化庁芸術祭賞大賞
- 平成27年 芸術選奨文部科学大臣賞
- 令和3年 ENEOS音楽賞
- 令和6年 旭日双光章

洋楽分科

いけ べ しん いち ろう
池 辺 晋 一 郎

(本名 池 邊 晋 一 郎)



職名 (肩書き) 作曲家

昭和18年9月15日 茨城県生まれ 82歳

授賞対象

長年にわたる作曲教授活動、並びに多方面にわたる卓越したリーダーシップに対し

授賞理由

池辺晋一郎氏は、我が国の作曲界を代表する大御所であり、作品は国内のみならず、海外でも高い評価を得ている。作曲活動だけにとどまらず東京オペラシティ文化財団ミュージック・ディレクターや石川県立音楽堂洋楽監督としての活動を通じて卓越した企画力で強いリーダーシップを発揮してきた。加えて放送番組などを通じて音楽芸術の素晴らしさを幅広い層に届ける努力だけではなく、音楽と演劇のコラボレーションにも力を注いだ。正にオールラウンドのクリエイターであり、今後も大きな貢献をすることが期待される存在である。

【略歴】

- 昭和42年 東京藝術大学音楽学部作曲科卒業 (同46年同大学院音楽研究科修了)
- 昭和57年 東京音楽大学作曲指揮専攻助教授 (同62年教授、平成26年客員教授、同30年名誉教授、現在まで)
- 平成13年 東京オペラシティ文化財団ミュージック・ディレクター (現在まで)
- 平成16年 石川県立音楽堂洋楽監督 (現在まで)
- 平成20年 せたがや文化財団音楽事業部音楽監督 (現在まで)
- 平成26年 日本中国文化交流協会副会長・理事長 (令和3年副会長、現在まで)

【賞歴】

- 昭和41年 日本音楽コンクール作曲部門第1部 (管弦楽曲) 第1位
- 平成3年 尾高賞 (後2回)
- 平成14年 日本放送協会放送文化賞
- 平成16年 紫綬褒章
- 平成30年 文化功労者
- 令和4年 旭日中綬章

映画分科

り
李 さん いる
 相 日



職名（肩書き） 映画監督

昭和49年1月6日 新潟県生まれ 52歳

授賞対象

映画「国宝」（令和7年）の優れた芸術的・娯楽的な成果に対し

授賞理由

アニメ映画に比して大ヒット作の少ない近年の日本映画界において、3時間という長尺で完成された本格的な長編劇映画として、稀に見る大ヒットを記録する一方、歌舞伎の面白さ、素晴らしさを広く国民に知らしめる役割さえ担う野心的な娯楽映画ともなった。俳優の演技、撮影の技術、時代を表現する劇場、衣装、美術などがきわめて繊細に選ばれ、精緻に再構成され、これまでも優れた映画を作ってきた李相日氏にとって、頂点を示す芸術的な成果を見せている。

【略歴】

平成11年 日本映画学校卒業

【賞歴】

平成12年 PFFアワード2000グランプリ、エンターテイメント賞（レントラックジャパン賞）、企画賞（TBS賞）、音楽賞（TOKYO FM賞）

平成15年 新藤兼人賞金賞

平成18年 報知映画賞作品賞（後1回）

平成18年 日刊スポーツ映画大賞作品賞（後1回）

平成19年 ブルーリボン賞作品賞

平成19年 日本アカデミー賞最優秀作品賞、最優秀監督賞、最優秀脚本賞、話題賞

平成19年 芸術選奨文部科学大臣新人賞

平成22年 山路ふみ子映画賞（後1回）

平成23年 毎日映画コンクール日本映画大賞

平成23年 キネマ旬報ベスト・テン日本映画監督賞、日本映画脚本賞、日本映画ベスト・テン第1位

令和 8年 芸術選奨文部科学大臣賞

1. 恩賜賞・日本芸術院賞について

(1) 概要

日本芸術院賞は、卓越した芸術作品又は芸術の進歩に貢献する顕著な業績ありと認める者に対して授賞されます。また、恩賜賞は日本芸術院賞の中から、第一部から第三部までの各部1名(組)以内に授賞されます。

本院における授賞制度は、昭和16年度に帝国芸術院賞(昭和22年度から日本芸術院賞)が創設され、恩賜賞は昭和24年度から設けられています。

授賞式は、昭和17年(16年度)から戦中、戦後の一時期を除いて毎年举行され、今回で82回目になります。

昭和25年以降の授賞式には天皇陛下の行幸を、平成2年からは天皇皇后両陛下の行幸啓を仰いで举行されています。

(2) 第1回授賞より今回授賞までの授賞数

恩 賜 賞 : 145

日本芸術院賞 : 716

(3) 選考方法

日本芸術院賞候補の推薦は、日本芸術院授賞候補者推薦委員及び日本芸術院会員により行われ、全会員で組織する授賞候補者選考委員会において選考します。授賞は、各部の選考、総会による承認をもって授賞候補者を決め、その候補者について、各部における投票を経て総会で承認を得ることにより決定します。

(4) 授与品

恩 賜 賞 : 賞状、賜品(御紋付銀花瓶1個)

日本芸術院賞 : 賞状、賞牌(1人1個)、賞金(1件100万円)

(5) 授賞式

令和8年7月に日本芸術院会館(東京都台東区)において行う予定です。

※今後、調整状況により変更となる可能性もあります。

2. 日本芸術院について

(1) 設置目的

日本芸術院は、美術、文芸、音楽、演劇、舞踊等芸術各分野の優れた芸術家を優遇するための荣誉機関として設置されています。

(2) 沿革

日本芸術院は、明治40年6月に文部省美術展覧会(文展)を開催するために設けられた美術審査委員会を母体とし、大正8年9月に「帝国美術院」として創設されました。その後、昭和12年6月に美術のほかに文芸、音楽、演劇、舞踊の分野を加え「帝国芸術院」に改組されるなどの拡充を経て、昭和22年12月に「日本芸術院」と名称を変更し、今日に至っています。

(3) 組織

日本芸術院は、院長1名と会員(終身)120名以内で構成され、会則により三部18分科に分かれ所属し、本院の設置目的を達するため必要な事業を行います。

院長は、芸術に関し卓越した識見を有する者について、会員による選挙を経て、総会の承認を得ることにより決定し、文部科学大臣により任命されます。

会員は、外部有識者で組織する推薦委員会及び会員による推薦、会員と外部有識者で組織する選考委員会による絞込み、会員による選挙を経て、総会の承認を得ることにより決定し、文部科学大臣により任命されます。

第一部 「美術」	第 1分科 第 2分科 第 3分科 第 4分科 第 5分科 第 6分科	絵画 彫刻 工芸 書 建築・デザイン 写真・映像
第二部 「文芸」	第 7分科 第 8分科 第 9分科 第10分科	小説・戯曲 詩歌 評論・翻訳 マンガ
第三部 「音楽・演劇・舞踊」	第11分科 第12分科 第13分科 第14分科 第15分科 第16分科 第17分科 第18分科	能楽 歌舞伎 文楽 邦楽 洋楽 舞踊 演劇 映画 ※アニメーションや放送、脚本を含む

(4) 主な事業

- ① 芸術の発達に寄与する活動を行うとともに、芸術に関する重要事項を審議し、これに関し文部科学大臣又は文化庁長官に意見を述べることができます。
- ② 会員以外の者で、卓越した芸術作品と認められるものを制作した者及び芸術の進歩に貢献する顕著な業績があると認められる者に対して、毎年、恩賜賞と日本芸術院賞を授賞しています。
- ③ 前記の他、恩賜賞・日本芸術院賞受賞作品展(無料)、会員講演会等の開催(無料)、日本芸術院会員記録の制作、日本芸術院の活動記録作製等を行っています。

3. 関係法規 (抄)

(1) 日本芸術院令

第1条 日本芸術院は、芸術上の功績顕著な芸術家を優遇するための栄誉機関とする。

第2条 日本芸術院は、院長1人及び会員120人以内で組織する。

(2) 日本芸術院会則

第4条 日本芸術院は、卓越した芸術作品と認められるものを制作した者及び芸術の進歩に貢献する顕著な業績ありと認める者に対して賞を授ける。

(3) 日本芸術院授賞規則

第1条 日本芸術院は、卓越した芸術作品、又は芸術の進歩に貢献する顕著な業績ありと認める者に対して授賞する。

第2条 賞は恩賜賞及び日本芸術院賞とする。

2 恩賜賞は、毎年各部1個以内とし、当該年度の日本芸術院賞中よりこれを推薦するものとする。

第3条 恩賜賞は、賜品とする。

2 日本芸術院賞は、賞牌、賞状及び賞金とする。